

池水寛治君をしのぶ

河口貞徳

池水君との出会いは、現在の玉竜高校の前身、市立高校第一部においてであった。当時、社会科教室室を仕切って半分を考古学研究室に充てていた。生徒だった池水君はこの部屋によく出入りし自宅にも訪ねて来て、ときには泊まつたこともあった。考古学研究会をつくることになって、彼は直ちに数名の生徒を集め、同好会を結成し、会長となつた。

昭和25年5月、金峰町の中津野遺跡を、池水君と2人で小学校の小使い室に泊まり込んで発掘した。完形土器がたくさん出土し、帯のしんで作ったリュックや大ぶろしきに山とつめこんで、まるで荷物が歩くような格好で、2人で運んだ。この調査結果は、県考古学会で彼に発表してもらったが、多くの大人にまじって、実に堂々たるものであった。同年12月に、根占町の依頼で鹿児島大学の三友国五郎教授と千束遺跡の発掘を行つたが、この発掘にも彼を伴つた。調査後、田代町の池水君宅に泊まり、岩崎遺跡を発掘した。この間、前後8日間彼は学校を休んだわけであるが、校外の研修活動として出席あつかいであった。

高校卒業後上京して絵の勉強に専念したようである。昭和33年12月、大根占町山ノ口遺跡の発掘で再会した。以後発掘のたびに手伝ってくれたが、昭和35年8月、栗野町木場の発掘後、出水高校に美術の教師として赴任した。彼の性格と出水兵児(へこ)の気風は非常によく会つたようで、絵に考古学にめきめきと頭角をあらわしていった。

考古学には努力で補えない「勘」が絶対に必要で、これはもって生まれたものである。池水君は鋭い「勘」の持ち主であった。出水市上場高原にころがっていた黒曜石の破片を見て、上場が旧石器時代の遺跡であることを洞察したのである。その石片は到底、旧石器といえるようなしろものではなく、当時南九州では旧石器の遺跡は1カ所も発見されていない時期であった。彼は上場遺跡の発掘に執念を燃やした。数次にわたる発掘の結果、わが国で最初の旧石器時代住居址(し)の発見となり、その業績は高く評価され、旧石器時代研究者としての不動の地歩を築いた。

彼は考古学研究に、あるいは絵の制作に数々の業績をあげたが、それは彼の己に対して厳しい性格によるところが大きい。しかも研究・制作に己を燃焼する彼の生活は、同時に彼を取りまく学生たちに類焼作用を起こして、続々と考古研究者を生んでいった。おそらく美術の面でも同様であつたろう。彼ほど多くの考古学専攻の学生を送り出した例を知らない。

彼は5年余の闘病生活にもかかわらず最後まで希望を捨てなかつた。私も彼の再起を信じていた。7日午前3時計(ふ)報に接し病院に駆けつけたが、穏やかな死に顔であった。私が拾つてもらうつもりであったのに、彼の骨を拾うはめになつた。

(昭和55年8月13日 南日本新聞朝刊より)